

## 令和2年度自己評価シート(年度末評価)

校番	202 127	学校名	広島叡智学園中学校・高等学校	校長氏名	福嶋 一彦	全日制課程	本校
----	------------	-----	----------------	------	-------	-------	----

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当部等
		実績値	目標値	実績値			
<b>1 国際バカロレア教育を、教育活動の主たるツールとして充実を図り、本校のミッション、ビジョンの達成を目指す</b>							
学校のアイデンティティを明確にし、生徒・保護者・教職員が自らの表現で、自身の行動・活動の目的を説明することができる。	年間の取組に対するルーブリックを用いた自己評価（生徒・保護者・教職員対象4段階）	-	平均値 2.8	2.9	<b>A</b>	9月時点の調査では、生徒・教職員の自己評価の平均が2.4であったが、下半期に三者懇談での「自分プレゼン」を設定するなどの取組により目標値を上回った。	IB推進 進路指導
日本の学習指導要領とMYP、SEE Learningを融合させた指導と学習を充実させることができる。	年間の取組に対するルーブリックを用いた自己評価（教員対象4段階）	-	平均値 2.8	2.9	<b>A</b>	9月時点の調査では、教職員の自己評価の平均が2.4であったが、下半期に教科を越えた相互授業観察を行うなどの取組により目標値を上回った。	IB推進 教務
生徒一人一人の英語力を高めることができるカリキュラムの開発と指導方法を確立し、一人一人の生徒が英語力を伸ばさせることができる。	各生徒の英語力の伸長（年度当初から1段階以上フェーズが上がった生徒の割合）	70%	75%	75.6%	<b>B</b>	成績処理の過程であるため、数値は出していないが、ほぼ目標値を達成することが見込める。	IB推進 教務

**【評価結果の分析】**

- ・ 生徒のルーブリックにおける自己評価は、前回(2.4/4)から、今回(3.0/4)へ大きく上昇した。下半期の取組として、各教科の学習と本校のミッションとの関係性を考えることができるような問いかけを行うことで、75%の生徒が学習やSAと本校のミッション等の関係性を表現することができた。また、年度末の三者懇談における「自分プレゼン」において、次年度以降の活動の計画を考える機会を設定することで、31%の生徒が、ミッション等と次年度以降に計画している取組との関係性を述べることもできた。さらに、今年度開始した生徒会活動により、生徒が主体的にミッションに基づいた活動を行うことができる機会も増え、生徒は、自身の活動とミッションとの関係性を主体的に考えることができている。
- ・ 保護者に対しては、コーディネーターニュース（10回）やビデオ（5回）の配信を通して、保護者が本校の教育活動に対して理解を深めることができるよう取組を行ってきた。コーディネーターニュースにおいては、高校から入学する予定の留学生確保に向けた取組の状況や、DPに関する情報を発信するなど、保護者が子供との関わりの中で、次年度以降への意識を高める働きかけができるよう情報発信を行った。
- ・ 年間10回の授業改善に関わる教員研修を全教職員で行うことや、教科を越えた相互授業観察を充実させることで、MYPの枠組みを用いた指導と学習の充実を図ることができた。令和2年10月のMYP認定時には、国際バカロレア機構からも、教科を超えた協働的な取組に関して高い評価を得ており、自己評価と外部評価が一致していると考えられる。
- ・ 英語力の伸長に関しては、10月に実施した外部検定試験などの結果から多くの生徒が各学年で目標とするレベルに到達する見込みがあることが伺えた。下半期は、外部検定試験や校内での取組をもとにクラス替えや個別の支援を行うなど、個に応じた適切な指導を行った。その結果、年度当初から1段階以上フェーズが上がった生徒の割合が75.6%であり、目標値を達成することができた。
- ・ 生徒の中には、本校で受験することができる外部検定試験以外の試験等を用いるなどして、自身で目標設定をし、英語の学習に取り組むことができている者も出てきている。さらに、実践的な英語力を身に付けている生徒もおり、WWLコンソーシアム支援事業の連携協議会においては、他校の高校生と英語でディスカッションを行うなどしている。

**【今後の改善方策】**

- ・ 教職員に対しては、年間で行う研修などの取組とルーブリックの関係性をより明確化し、それぞれの教職員が、目標設定において、ルーブリックを活用し、本校のアイデンティティを表現することや、指導と学習の改善に役立てることができるよう取組を進める。
- ・ 生徒に対しては、進路指導部と協力し、本校で身に付けたい資質・能力を身に付けることでミッションの達成に近づくことができることを再確認させ、その伸長に学校全体で取り組む。
- ・ 保護者に対しては、引き続きコーディネーターニュースを中心とした情報発信を行うとともに、数年後を見据えて、子供との関わりができるよう、関係機関と連携し充実した情報発信を行う。
- ・ 英語力の伸長に関しては、生徒の力に基づいた適切な外国語科のクラス編成を行い、個に応じた目標設定及び指導を充実させるとともに、その他の教科においても体系的な英語力の伸長に関わる指導ができるよう、カリキュラムのさらなる充実を図る。

2 寮生活における多種多様な人とのコミュニケーション活動等を通して、将来のリーダーとしての人格の陶冶に努める

生徒一人一人が、寮生活におけるきまりを厳守し、主体的に規律ある生活を送っている。	生徒アンケート調査における肯定的回答の割合	67%	80%	94.4	A	ユニットリーダーや生徒会委員長を中心に、より良い学校づくり、寮生活の実現に向けて自治的な活動を充実させるために、評価と改善を図りながら取組を進めることができた。	寮務 生徒支援
生徒一人一人が、寮生活における様々な人との関わりや活動を通して、安心して充実した寮生活を送れていると感じている。	生徒アンケート調査における肯定的回答の割合	74%	80%	92.3	A	係活動や毎日の清掃活動の目的を示し、継続した取組を進め、集団活動の充実を図ることや個に対する丁寧な声かけ等、必要に応じた面談等を継続して行うことができた。また、異学年での生活を充実させる取組やハウスマスター、ハウスサポーターと教職員との連携や指導方針の共有を図ることができた。	寮務 生徒支援
生徒一人一人が、自己の健全な生活を実現するために、食に関する意識を高め、望ましい食習慣を身に付けている。	生徒アンケート調査及び地産産物の活用状況(県の目標値)における肯定的回答の割合	-	80%	87.2	B	特別活動(学級活動)で食に関する授業を実施し、また、食に関する掲示の取組等を進めることで、生徒の食に関する意識を高めることにつながることができた。	寮務

【評価結果の分析】

・ユニットリーダーや生徒会委員長を中心に、より良い学校づくり、寮生活の実現に向けて自治的な活動を進めてきた。リーダーだけではなく一人一役として、係活動や毎日の清掃活動を大切にすることで集団が高まることや、個に対する丁寧な声かけと必要に応じた面談等を継続して進めることができた。また、居室の整理整頓や洗濯等、個別の支援を充実させるとともに、生活実態を家庭と情報を共有するなどの取組を進めることができた。その結果、寮生活に関するアンケート調査項目「あなたは、生活の決まりを守り、規律ある生活を送っていますか？」において肯定的な回答が 94.9%と高い数値になった。しかし、肯定的な回答のうち「できている」と回答した生徒は、35.9%であり、「どちらかというときていない」と回答した生徒は、59.0%であったことから、十分な取組とはなっていない。さらに、「どちらかというときていない」、「できていない」と回答した生徒もおり、集団への働きかけと同時に、個への丁寧な支援等が一層必要である。そのため、寮則の目的を一人一人の生徒が理解し、実践できる力を育成していくことを今後も継続していく必要がある。

また、異学年での生活を通して、2年生が後輩をサポートすることや、1年生が理想とする先輩像をイメージし高め合っていくための取組を進めること及び、ハウスマスターやハウスサポーターと教職員との連携や指導方針の共有を図ることは、今後も継続していく必要がある。

・自己の健全な生活を実現するために、特別活動(学級活動)の食に関する授業や食に関する掲示の取組等を進めることで、食に関する意識を高め、望ましい食習慣を身に付けていけるように取組を進めることができた。寮生活に関するアンケート調査項目「あなたは、食事のマナーや栄養などの食生活に関する正しい知識を習得し、自身の健康と身体の管理ができていますか？」において肯定的な回答が 87.2%と高い数値になった。しかし、肯定的な回答のうち「できている」と回答した生徒は、50.0%であり、「どちらかというときていない」と回答した生徒は 37.2%であったことから、全体的に「できている」と回答する生徒を増やしていくためには、日頃の残食の状況や生徒の生活の観察から、食事を残さず食べることや食事中の姿勢、寮内での間食の取り方についての指導等を今後も継続していく必要がある。

【今後の改善方策】

① 生徒との信頼関係づくりを基盤とした寮運営

生徒の心に寄り添うための厳しくも温かい指導の実践と、個の生活実態に応じた支援の充実を図る。また、中学校完成年度における異年齢集団での生活の充実と、留学生等を含めた多様な文化の中で、誰もが安心・安全に生活するための寮則の再検討を図る。

・寮則の見直しについては、学年・学級の学活の時間を活用し、生徒が主体的かつ計画的な見直しが図れるようにする。

- ・現在、取組を進めている毎朝の清掃活動に加え、令和3年度からは「心の貯金活動」と称して、毎週水曜日をユニット・居室清掃日とし、生活環境の安定を図り、自治的な活動の一層の充実を図る取組を行う。
- ② 保護者との積極的な情報共有  
寮生活の様子を積極的に発信していくとともに、電話等を通して気なる様子や良さを発信していく。また、来校時等、可能な限り直接居室等を見てもらえるような機会を設定し、保護者と情報を共有しながら生徒一人一人の生活の支援を行う。
- ③ 望ましい食習慣を身に付けるための手立て  
食生活に関する意識の問いについて、アンケートの肯定的な回答が高い数値になっているが、「できている」と回答している生徒は5割となっている。今後、全体的な底上げが必要であることから、栄養教諭が中心となって、全教職員が十分に連携・協力して食の指導に関わることにより、生徒に対して、継続的かつ効果的な指導を行う。また、食に関する授業についても、学年毎に題材を定め、各教科等の学びと関連させるなど、効果的な授業計画や指導を図る。

3 各教職員が限られた時間の中で業務の効率化とタイムマネジメントに努め、「学校における働き方改革取組方針」の徹底を図る							
教員が、子供と向き合う時間が確保されていると感じることができている。	業務改善アンケート項目における肯定的回答の割合	71%	75%	91.2%	<b>B</b>	「子供と向き合う時間が確保されていると感じることができている」と回答した教員数が増加しており、目標を達成した。	校務運営委員 管理職
教職員全員が勤務時間に対して高い意識を持ち、時間外における勤務を縮減している。	一月当たりの時間外勤務時間が45時間以下の教職員の割合	45%	60%	88%	<b>B</b>	「入退校時間」を設定し、学校全体で取組を行った結果、教職員の意識が一定程度高まり、目標を達成した。	校務運営委員 管理職
教職員に対して、全体・学年・分掌において、形態を工夫しながら、働き方改革に関する研修を実施している。	全体・学年・分掌における研修の実施合計回数	-	1回	3回	<b>A</b>	年度当初から9月末までの間に3回の職員研修会を実施した。また、各分掌で、下半期の働き方改革の具体的な取組を設定し、実施した。	校務運営委員 管理職

**【評価結果の分析】**

- ・9月の校内研修会後に実施したアンケート調査では91%、県教育委員会が実施した「令和2年度県立学校における働き方改革・業務改善に係るアンケート」では、91.2%の教員が、「子供と向き合う時間が確保されていると感じることができている」と回答しており、目標を上回るものであった。一方で、生徒の成果物等を評価する業務が多くを占めており、生徒と顔を合わせて質問に応じるなどの時間が十分確保できていないといった課題も明らかになった。
- ・全県的な取組として進められている「入退校時間」の取組について、学校衛生委員会では本校の「入退校時間」の素案（入校7:00から、退校19:00まで）を作成し8月の校内研修会で検討した。その後、9月から12月までの間を試行期間として設定し、日常的な声掛けや会議での継続的に周知・徹底を図った。その結果、一定の定着がみられたことから、令和3年1月から正式に運用を開始した。多くの教職員が、この「入退校時間」を意識した業務遂行を行うようになり、月あたり45時間を超過する職員の数が増加している。
- ・年度当初から9月末までの間に3回の職員研修会を実施した。具体的には、子供と向き合う時間の定義等を再確認し、現状の問題点や必要な方策についてグループで協議したり、各個人に対し時間外の記録を記載した個票を配付し確認させた後に、改善策を検討したりするなどの活動を行った。また、各分掌で、下半期の働き方改革の具体的な取組を設定し、実施した。その結果、職員の日常的な様子から勤務時間内の業務遂行を意識している様子が見られるようになった。

**【今後の改善方策】**

- ・子供と向き合う時間の確保ができるよう、引き続き会議や行事の精選を進めるとともに、学級担任が生徒と計画的に面談を実施するなど、子供と向き合う時間の質的な充実に向け、各分掌や学年で効果的な事例を共有化し、実践する取組を継続する。
- ・新年度の当初から、多くの教職員が、「入退校時間」を意識した業務遂行を行うことができるよう、令和3年1月から正式に運用を開始した「入退校時間」の取組（入校7:00から、退校19:00まで）から得られた成果と課題を整理し、具体的な方策を検討・策定することにより一層の定着を図る。
- ・下半期に、各分掌や学年会で働き方改革取組方針に沿って設定した、資料の整理整頓やデジタル化などの個々の取組を継続し、その振り返りを行うことで新年度の働き方改革に関する研修の年間計画の策定に活かす。